２０２５年春 EAA 北京研修

楠田薫
The University of Tokyo

**風景の不確実性**

研修中「研修中に見た風景を A4 一枚の作品にまとめる」という課題に取り組みながら、「風景」というものの捉えにくさに気づいた。私の注意の払い方よって見える風景が変わるということ、そして風景そのものも変化していると考えたからだ。

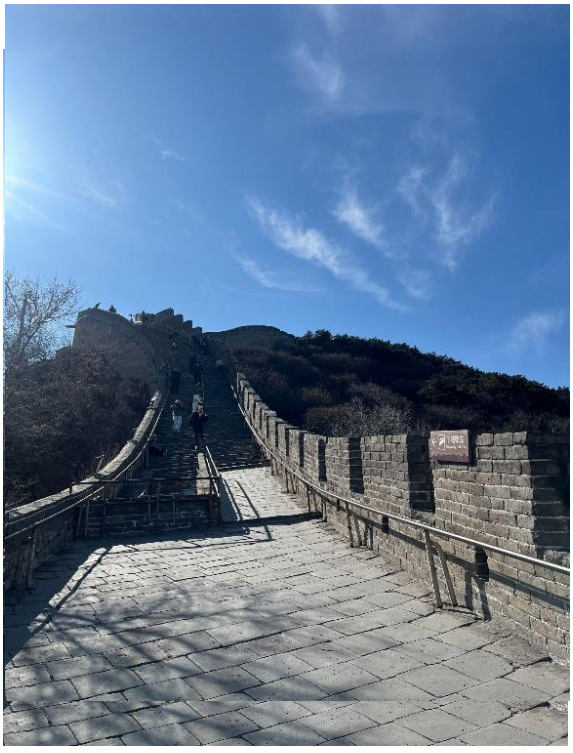
目配りの仕方は見える風景を変える。例えば、北京大学の見学では考古学博物館で鳥モチーフの出土品に興味を持ったあとは、キャンパス内の鳥が目に止まるようになった。

また、頤和園で皇帝が北京に蘇州・杭州の景観を再現しようと造らせた湖を見た時には、風景自体を変えてしまうという発想やそれを実現できる皇帝の権力に驚いた。そして、円明園を訪れた際に自分もまた風景のあり方と無関係ではないことを学んだ。円明園がアロー戦争で破壊された西洋庭園の跡であることを踏まえて、一緒に行った人が「ここでニコニコの集合写真を撮るのはやめておこう」と言ってくれたからだ。観光客として風景を観察している時、自分と風景を切り離して考えがちだが、実はその自分もまた他の人にとっては風景の一部であるのだと再確認した。

風景そのものが可変的であり、さらに私の注意の振り分け方によって風景の見え方は変化している。その不確実性を自覚しながらも、この 5 日間私が見て考えたこと、大切だと思ったことを書き記し、報告する。

**歴史の種**

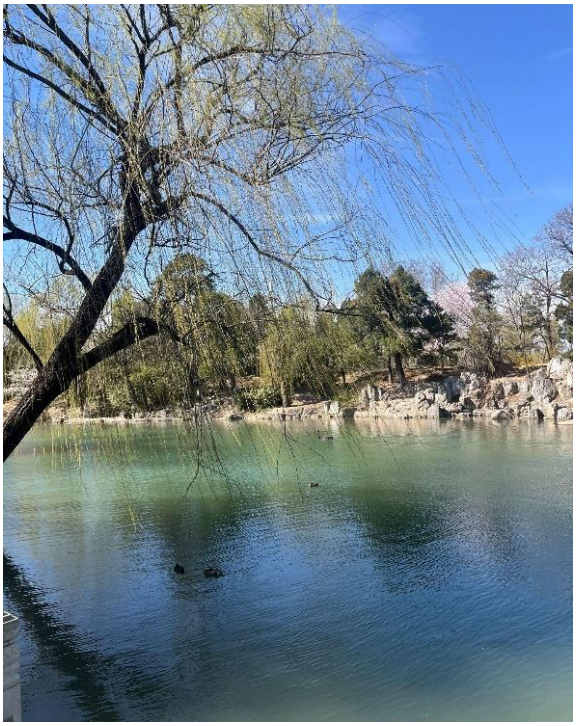
今回の研修では頤和園、万里の長城、円明園などの歴史ある場所を訪れ、実際に土地に立つことの力を感じた。世界史の教科書やインターネットで見る写真では単一の画角からしかその場所を把握することができないが、現地に行けば当然、歩き回って視点を変えたり他の観光客の雰囲気を感じとったりできる。それだけではなく、例えば万里の長城では「これを建設するために駆り出された人はどんな思いで岩を運んでいたのだろう」とか「ここで武器を構えて敵を待つのはどんな気持ちだろう」というように想像力を喚起される気がした。昨年度 TLP 研修で台湾を訪れた際にも、先住民の歴史について実際に事件の起きた場所で学ぶ機会があり、場所が想像や感情に与える力を感じたことを思い出す。これらは今の所はまだ漠然とした感覚にすぎないが、私にとって今後歴史について考えるための大切な種になりそうだ。



急傾斜の万里の長城。昔の人はどんな思いで
ここを登ったのだろう。

**絶壁の制度**

北京大学の学生と交流した時に聞いた一言がこの 5 日間で最も印象に残っている。中国の大学入試のシステムを説明してもらっていた時、私が「でもそれって不公平じゃない？」と聞いたら「この世界は不公平だから」と返ってきて、私は何も言えなくなってしまった。清華大学でも同じようなことがあった。夜ご飯を一緒に食べながら、高考の激しい競争を突破して大学に入ってからも希望の学部や留学先のために成績を競い合うことについて「高校から今までずっと競争ではメンタルヘルスに悪いのでは」と聞くと「ついていけない人もいるけど、私たちはもう慣れたから大丈夫」という返事だった。これらの言葉からは「制度が不公平なことは諦めるしかなく、それよりも自分の資質でそれをどうにか乗り越えることに集中するべきだ」という感じを受け、中国の学生にとって制度とはそんなにも堅く、絶壁のようなものなのかとショックだった。



観光スポットにもなっている清華大学キャンパスの美しい湖

日本でも住む場所や親の経済力によってアクセスできる教育資源には差があり不公平な点があるにも関わらず、今まで私がこの世界は不公平だからと諦めずにきたのは私が比較的有利な立場にあったからだろう。ただ、とにかく今の私は北京大学と清華大学に対して孤独な競争の風景の印象を強く持ったのだ。

北京大学と清華大学の美しいキャンパスには本当にたくさんの観光客がいた。それほどまでに憧れの対象となっている大学に通う学生たちにとって、激しい競争を潜り抜けて見る風景はどのように見えているのだろう。

**交流の楽しさ**

もちろん悲観的な印象ばかりではない。両大学での交流の際、本当に親切に受け入れてもらい温かい気持ちになったし、新しい友達をつくれたことは率直に嬉しかった。渡航前から高考の厳しさは話に聞いていたので、みんなすごく天才気質なのだろうと想像していたところがあったが、学生たちは実際に話をしてみると気さくで話しやすく大学生活や留学の話で盛り上がった。また、これまで 2 年間で勉強してきた中国語を使って、自分の言葉で直に会話できたことにも心が弾んだ。そのように友達同士として交流できた彼ら彼女らのことをもっと理解したいから新学期は中国語や中国、日中関係についての勉強を一層頑張ろうと思ったし、今後の EAA の活動で再び会える日を心から楽しみにしている。